

書香

1982. 10. 1

NO. 2

図書館電算化はバラ色ではない。

富山大学附属図書館長

若林 嘉一郎

本稿を読む前に次ページを開いて頂くと、読者は「わが計算機センターが間もなく情報処理センターに脱皮し、図書館を含むさまざまな部局の情報処理を行う」ことを知る。

これは「わが図書館が学術情報センターシステム（昭和59年開設予定）への参加のサポートを入手した」ことを意味する。

図書館が情報処理センターと結ぶ適正端末機さえ保有すれば、ユーザーが文部省の狙い通りの良質サービスを楽しむことの保証があるならば、このあたりで「めでたし、めでたし」と本稿を結べばよいのだが……。事態はそれ程甘くはない。

1950年以降の新プロジェクトの主流は計算機を用いた複合技術のシステム化であった。そして、われわれは「計算機の関与するプロジェクトはそれぞれ有益ではあるが、宿命的に多少のデメリットを随伴する」ことを体験した。かくして、新プロジェクトの採用以前におけるテクノロジーアセスメントの洗礼が現代社会の常識となった。

わが図書館の電算化においても、事前アセスメントは不可欠である。昨年、二神前館長のもとに創設された図書館電算化委員会は「電算化により、計算機嫌いのユーザーに不便を与えてはいけない」という事前アセスメ

ントの思想から「電算化後においてもカード目録は廃止しない」との方針をきめた。

同じ思想を出発点として、今後は上記以外のデメリット防止策の発見にもつとめるが、その過程においてはユーザー各位からの御提案を基盤としたい。

見落としのない事前アセスメントは相当困難な作業であるが、それさえ実施すれば図書館電算化がユーザーサービスの向上に直結するかといえば、絶対にそうではない。

わが図書館には非常勤を含め28名の職員がいるが、その数は昭和39年以来増加していない。しかるに、その間にわが館の蔵書数は約2.5倍となった。1人当たり作業量のこのような増加に喘（あえ）いでいる図書館職員に、電算化によるユーザーサービスの向上（学術情報センターシステムへの参加）という新しい仕事を課すのは無理な相談といえる。

この悲観的な事態の打開策には、情報処理センター機によるOA（オフィスオートメーション：業務の省力化）しかない。すなわち図書館電算化の成功、不成功はOAシステム設計の巧拙にかかっていると断言できる。

（注）図書館と学術情報センターシステムとの結合部設計は計算機メーカーに一任できるが、OAシステム設計はそれでは不完全。